

## はじめに

月日の経つのは早いものとは本当のことと思います。我々が奥三面ダム建設のため、山の中の集落三面から村上市に移転して今年で二十五年目に入っております。

私は昭和一桁生まれ、本籍は新潟県三面村大字三面でした。三面は歴史が長かったこともあり昭和二十九年、五ヶ村合併になる前までは三面村十一ヶ村の本村でした。合併後は朝日村大字三面となりました。ここは広大な朝日連峰の山、また山の中にあり、たとえば隣の集落でも一番近い所は、山形県側へは小国町の入折戸へ約十キロメートル、同じ新潟県では朝日村の岩崩の集落で、二十キロメートル離れておる所でした。そして明治時代までの三面集落の共有地は三万ヘクタールでした。当時の戸数は二十九戸だと思えます。当時の三面は何をするにも歩く道よりないため、何を運ぶにも各人背負うより方法はありませんでした。

昭和五十八年に山形県の朝日村、新潟県の朝日村を結ぶスーパー林道が開通してからは三面から村上市まで車でおよそ一時間で行けるようになりました。もっとも林道ができたといいますが、冬の間は雪で通行できなくなります。そこで三面川下流の岩崩にある三面ダムのダム湖を船で移動し、船着き場から集落までは歩いたものです。冬、その湖面が厚く凍って船が進めなくなると、その凍った湖面を歩いて町へ、集落へと向かったものでした。

この本に収めさせて頂きましたお話は昭和十五年から二十年代のものが中心です。その頃の一年を振り返ってみますと、春はクマ猟のデジシをする他にも、ゼンマイ採りや田んぼのことがあり、とても忙しかったものです。夏はカノと呼ぶ焼畑でソバやアズキ、アワなど雑穀をつくりました。山の中ですから田は水も冷たく、お米の収量は多くはありませんでしたので、カノでつくる作物は重要でした。秋はクマの罾であるオソを切ったり、キノコをとったり、冬は寒中に行なうカモシカ猟などの他に養や笠、ワラジなどをつくって春に備えたものです。

ゼンマイを乾燥させたものや、狩りで山の神様から授かったクマ、その皮や胆は重要な現金収入でしたし、冬の間にスゲで織ったゴザを担いで運んで売りに出したものでした。なお、昭和二十年代後半からは、工事現場など日雇いの仕事でも稼ぐようになりました。

ですが、奥三面ダム建設のため集落すべて水没の運命となり、止むを得ず現在地の村上市に移転せざるを得ませんでした。昭和六十年九月一杯で三面は閉鎖され、同年十月一日、我々は村上市の住民となりました。当然のことながら、生まれ育った地で一生生活する心算でありました。先祖から三十七、三十八代引き継がれて来た土地ですから、自分たちも大切に守るべきと考えておりました。大昔から馴れと申しますか、自給自足のできる所として、私たちの先祖からずっと続いて来た所です。山での仕事はどうしてか楽しかったように思います。

移転後も十年ほどは、通行できる四月頃より十一月頃まで暇さえあれば行ったものです。四季を通じ山の仕事をこなってきたことは忘れられず、町の仕事に慣れていないせいもありましたが、及ばぬことと思いつつも悩んだこともありました。

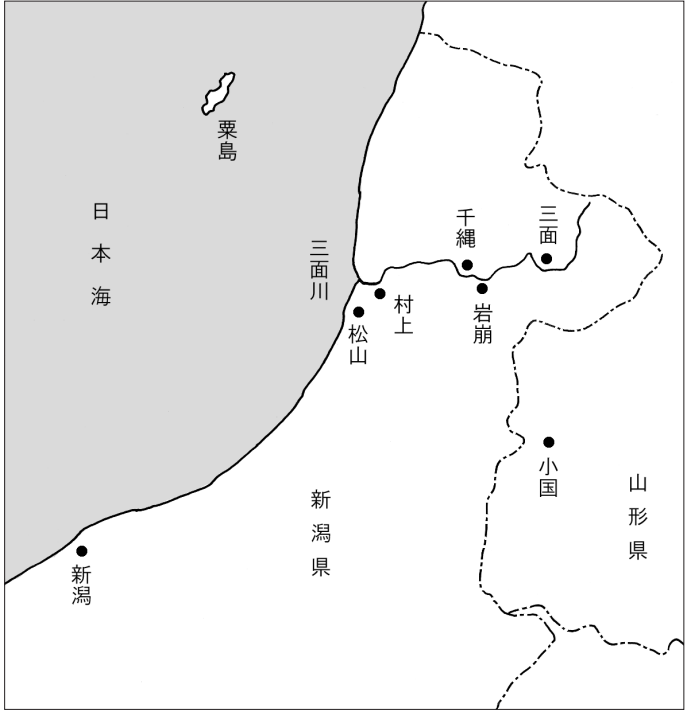
稼ぎの方は、移転前から三面林業協同組合を結成、平成十年頃まで林業関係の仕事をこなしておりましたが、その後はほとんど仕事らしい仕事もせず、年だけは重ね何と七十七歳になりました。最近は何年ですので、山の

ことを思い出ししても実行できずにおりましたから、先輩より訓えられたことから自分で実際に行なったことなど、書き残さなければと思っておりました。

本書をまとめあげるにあたり、渋澤寿一さん、伊藤憲秀さんに御尽力頂きました。紙面を借りて感謝申し上げます。本当に有難うございました。

平成二十二年二月

小池 善茂



# 山人の話

目次

# 第一部 山人の話

## 第一章 百姓百色

### 一 冬に備えて暮らす 18

- ◆ 春夏秋冬、そして冬 ◆ 薪集めと肥運びは春先の仕事 ◆ ゼンマイのとり方
- ◆ 短い夏と忙しい秋 ◆ 雪が降る前に ◆ 冬の間につくるもの

### 二 村人として分ち、家として利用する 30

- ◆ 三つの「財産権」 ◆ いくらでもとれたマスやイワナ ◆ 村のクリと山分けの薪
- ◆ 誰のものでもないカヤ ◆ 小池の先祖と合祀

### 三 技と知恵を持つ 37

- ◆ 官民境の設定 ◆ 営林署の管轄になって ◆ 地名のこと ◆ 岩山と増水、凍ったダム湖
- ◆ 増水時の川の渡り方 ◆ 雪下ろし ◆ 丸木舟 ◆ 発破 ◆ 戦争の時代の小学生 ◆ 男衆と女衆

### 四 塩木を流す 48

- ◆ 浜で使われた三面の木 ◆ 乾燥させて運搬 ◆ 造り道 ◆ 木流し ◆ 塩木と宿

## 第二章 寒中のカモシカ狩りースノヤマとサルヤマ……………

53

### 一 出発の準備をする 54

- ◆ 数え年十五歳で若い衆 ◆ 小寒中に奇数日泊で ◆ 柴が邪魔しない積雪量
- ◆ 荒れた日に入山 ◆ 出発前の心得

### 二 山境を越える 59

- ◆ 送り人と先漕ぎ ◆ コエト山 ◆ 山の人と送り人

### 三 雑用をこなし、山を覚える 62

- ◆ スノ小屋 ◆ 狩りの階級と役割 ◆ 蓑笠の乾燥とご飯の支度
- ◆ 毎朝の水垢離 ◆ 山を覚えることが第一

### 四 雪山でカモシカを探す 68

- ◆ スノヤマとサルヤマのしきたり ◆ スノ場 ◆ カンジキと川渡り
- ◆ 休憩と待機 ◆ 雪崩の危険 ◆ 事故に遭うわけ ◆ 尾根と雪庇

### 五 カモシカを巻く 80

- ◆ 巻狩りのやり方 ◆ 逃がした場合 ◆ 計算した行動 ◆ 松明と焚き火

### 六 山で拝む 88

- ◆ 昔の小屋 ◆ 自然相手の狩り装束 ◆ 山の神様と十二月十二日とアオシシ狩り

## 第三章 クマ狩りーデジシとオソ

.....

### 一 クマと出遭う 100

◆ 親子グマ ◆ 生まれた所に行くクマ ◆ 三面のクマとり

### 二 山の神様からクマを授かる 106

◆ 巻狩りのやり方 ◆ ヨロコビオオゴエとホナビラキ ◆ 七串焼き ◆ ゆとがけの唱え

### 三 山の神と仏、獣と人とを別ける 115

◆ 山の神様からの授かりもの ◆ 寒中のクマ ◆ 人と獣の区別 ◆ 仏ごととの区別

### 四 村で、山で、決まりを守る 122

◆ 村の内で ◆ 血と狩り ◆ クマ猟とカモシカ猟

### 五 本当にあったことを伝える 127

◆ 聞かば話すな、話さば聞くな ◆ もしまた戻れるなら



## 第四章 四季の行事―暮らしにある祈り……………

131

### 一 年の瀬を迎える 132

- ◆ だんごさし（十二月八日） ◆ 山の神のまつり（十二月十二日）
- ◆ 駒型とヤマサキの家（山の神のまつり） ◆ 神楽宿の当番と権利（山の神のまつり）
- ◆ スス掃き（十二月二十七日） ◆ 松迎え（十二月三十日） ◆ 松飾り（大晦日）

### 二 謹んで正月を過ごす 140

- ◆ 元旦のお清め ◆ 若水汲みと湯漬けご飯（元日） ◆ お参りと年始回り（元日）
- ◆ 仕事のしそめと年祝い（一月二日） ◆ 寒の水（一月六日頃）
- ◆ 七草（一月七日） ◆ 肥背負い（二月十一日）
- ◆ 正月の松飾り（一月十四日夜・十五日早朝）
- ◆ だんごさしと田打ち道具（一月十五日早朝） ◆ 鳥追い（一月十五日早朝）
- ◆ 小正月のメ縄（一月十五日朝） ◆ 田ばやし（一月十五日朝）
- ◆ 仏様の椿（一月十五日午前中） ◆ なるかならねか（一月十五日午前中）
- ◆ 松焼き（一月十五日午前中） ◆ 小正月元日とやまいなし（一月十六日・二十日）
- ◆ 松焼き（二月一日昼過ぎ）

### 三 神仏にたのみ、祖先を敬う 153

- ◆ 神送り（二月二日） ◆ 鍬おろし（二月九日） ◆ お寺のだんご撒き（二月十五日）

- ◆山の神下り（二月十五日） ◆ゆい節句（五月四日） ◆植え初め・植え終い
- ◆さなぶり（七月一日頃） ◆虫送り（七月一日頃） ◆むしけの一日（七月一日）
- ◆ねずみ送り ◆お盆（八月七日、十三日く十六日） ◆百万遍（八月二十二日）
- ◆刈り初め ◆大刈り上げ（十月二十九日） ◆田の神上がり（十一月十六日）

## 第五章 焼畑の循環―自然の力を借りるカノ

163

### 一 適地適作をすすめる 164

- ◆カノ畑と自畑 ◆カノに適した場所 ◆カッパツケ ◆カノ焼きの時期

### 二 ソバをつくる 168

- ◆草刈り ◆火入れ ◆種蒔き ◆草取り ◆刈りどき ◆乾燥と脱穀

## 第六章 構造物―オソ・小屋・ハサ

173

### オソ 174

「作業手順」タナをつくる／マッタを立て、ハリを渡す／オオソグイを立てる

天井部分をつくる／クマを逃がさない工夫をする／天井を上げてブチをかける

仕掛け部分をつくる／仕上げる（床・重石・側面・周囲）／岩盤の上にオソをつくる場合

■オソの高さとハリの曲がり ■杭の向きと立て方 ■ネジとネジの締め方

■細いカマヅカと緩むネジ ■タナについて ■ブチの役割

■仕掛け部分での注意 ■重石の重さ ■クマの習性とオソを自然物に見せる工夫

■使ってはならない木 ■とったクマの運び方

## 小屋 194

「作業手順」基本の骨組みをつくる／屋根（側面）と前後の骨組みをつくる／屋根を葺く／仕上げる

■三面の小屋 ■小屋づくりの材料 ■小屋の基本構造

■屋根と前後の骨組み ■屋根のカヤ押さえ ■小屋の支え

## ハサ 205

「作業手順」立て杭を立て、ハサ木を渡す／支えを立てる

■ハサの場所と柱 ■結束の仕方 ■ハサの支え

# 第二部 山人の暮らす世界

## 第一章 三面の全体図

### 一 山と川と集落 218

◆村の内 ◆山境と三面川上流周辺 ◆連なる山々と川の上流側 ◆現金収入と物品購入

### 二 行事 221

◆田の神と行事 ◆行事と場所 ◆厄を送る行事

### 三 生態 224

◆三面の生態ピラミッド ◆消費者としての人 ◆栄養素の流れ

217

## 第二章 狩りの図―カモシカ猟とクマ猟（デジシ）

229

### 一 カモシカ猟 230

◆エダイラですすむ準備 ◆山境での切り換え ◆山境より向こう ◆獲物に係わる定め

二 クマ猟（デジシ） 236

◆デジシとカモシカ猟の相違点 ◆クマに対しての決まりごと

第三章 空間概念図―家をめぐって・集落と山をめぐって… 243

一 家をめぐって 244

◆茶の間という空間 ◆囲炉裏をめぐる意識 ◆屋敷にかかる行事空間 ◆大山祇神社の位置

二 集落と山をめぐって 248

◆太陽と月のもとにある三面 ◆高低差の大きい三面 ◆山の神様のおわすところ  
◆松焼きをめぐる空間 ◆厄を送る空間 ◆行事の行なわれる日と月

第四章 三面に内在する秩序と敬意…………… 253

一 見えるものの世界と見えないものの世界がある 254

◆第二部の趣旨 ◆同じ空間にあるさまざまな要素

二 山々と暮らす 256

- ◆ 三面の四季 ◆ 月と行事 ◆ 決まりごとのある狩り ◆ シシの代わりの林
- ◆ 生きものたちと生きること

三 境を識つて弁える 261

- ◆ 村境、山境、村境と山境の間 ◆ エダイラ、村境と山境の間
- ◆ 上流と下流、高みと低み ◆ 人の世界と山の世界 ◆ 神と人と仏、人と獣と仏
- ◆ 山人と人、クマ・クマノシシとクロイシシ ◆ 日のけがれ ◆ 境を貫く敬意

四 見えないものたちと呼応する 268

- ◆ ソバの都合 ◆ 稼ぎの仕事にはない狩りの何か ◆ 命をいただくということ
- ◆ 目に見えないものとのやりとり ◆ 賑やかで豊かな空間

おわりに 273

関係資料一覧 278

索引 286

## 五 カモシカを巻く

### ◆巻狩りのやり方

山を歩くときは、口にするのはちゃんと持っているんだ。腰に餅の焼いたのを入れたりさ\*。それで、一時間近くも登ったりするけども、そういうときは口にしない。いざ、あそこにカモシカがいたと、そうすると今度、誰がどこ、あの人はここだと配置を確認する。そのときに食べる。お腹空いて歩けなくなったから食べる、それでは駄目なんだ。空いても空かなくても、巻狩りする前に食べて。カモシカを逃がす場合もあるし、そのときになってお腹が空けば大変だから、その準備をしておく。

カモシカ見つけた場合には、獲物に感づかれないよう尾根の陰(a)で、まあ誰がどこに行くということで、配置の確認をする。それで経験の浅い若い衆(C)は一番奥に行くんだ。そのときにも、獲物に感づかれないようずーつと尾根の陰をまわって行かなければならない。経験者はカモシカのいる所から下、沢の入り口は一番肝腎な所なのでそこへ行く。獲物を突く役は、「サ

\*腰に餅の焼いたのを入れた

セナカワ (P 92 図参照) とサシコ (木綿の上着のこと) の間に入れて餅を携行する。餅はヒヅツという草を編んだもので包み、それをゼネブクロという紐のついた麻布の袋に入れ、その紐でセナカワを固定する腰紐に縛って携行した。

\* ( ) アルファベット

a、A、B、C は P 82 図に対応。

ワフタギ」(B) と言うんだ。これは沢をふさいでいるという意味で、経験者がやる。初心者とか初めての人はできないんだ。だからカモシカより下方には経験者がいて、上の方には二年目とか最初の人たちが行くことになる。

各自持ち場へ行っただとしても誰も出ていない。一番奥に向かった若いのが最後に自分の持ち場に着くから、そうしたら「ムカダテ」(A) という指示を出す人に、着いたと分かるように出なければならぬ。みんなから見える向かいに立っているからムカダテと言うんだけれども、その人に伝われば、「ああ、配置についたな」というのが分かるから。ここで今度は始めてもいいということ、そうすると下がって行くの。「ヤーヤー」とか「ヨオヨオ」とか言えば、「あ、始まったな」と、他のみんなも分かるわけだし。

そして、なんだってカモシカは警戒心が強いから変な音——ピチンパチンなんて柴の音立てたり、別に声出さなくても下がると、「何か来たな」ということは分かる。それで、「やあつ」と言うと、下がるわけだ。そうすると雪は軽いもんだから、雪の中パツと潜って何秒も立たないうちに下に行ってしまう。カモシカなんて雪の中で全然見えなくなるんだ、雪崩のときのように。速いんだあ、下りだすと。吹雪のような格好だ。もつともカモシカだつて、何から何まで全部下に下って行くというわけではないんだ。やはり斜面を横に行く、そういうのもたまにはあるけれども、上へ行くことはなく、ほとんど下へ行くから、その下へ向く習性を利用してとるといふことなんだ。

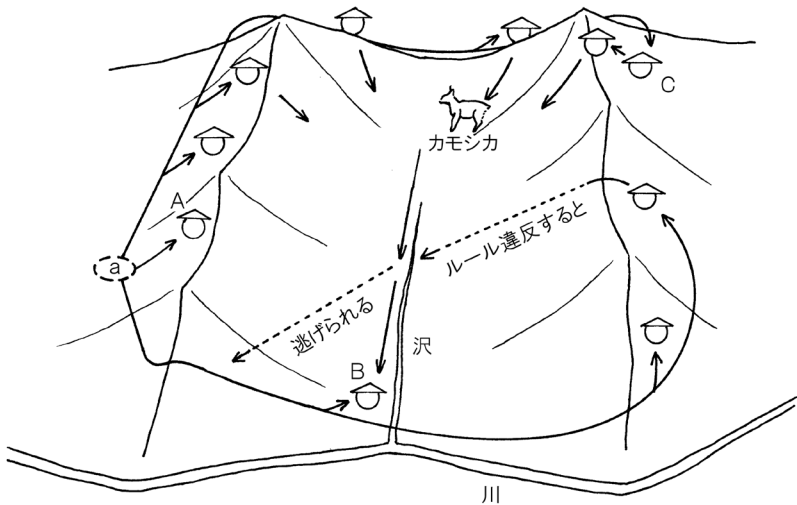
サワフタギの方にやるのが目的だから、カモシカが右手側向いたら右手の



人が早めに行けば左手側行くし、逆に左手側に行った場合には左手側の人が足早に行く。右、左手の人どちらも、全体は見渡せないから、それよりも高い所から見ているムカダテが指示を出す。たとえば、「右手の人まっとなれ」と。「もっと」とっていうのを方言で「まっと」と言うんだ。それと、「怒鳴る」ことを「鳴る」と言う。「まっと鳴れ」とか「まっと下がれ」とか。三面の方言だな。「誰々まっと下がれ」と言うと、「やあやあやあ」とって鳴りながら下がる。たとえば、右手側にカモシカが向かっている場合には、「左手の者が黙っていれ」とか。そうすると左手の人が黙って、すると音のしない方へ向かってくるから、そのようにするんだ。

まず我々は尾根にいますから、対岸の人を確認するというのも、注意深く見てなければならぬ。雪が降っていない良い天気ならそういう人も見えるけど、ちよつとした吹雪でも見えなくなるし、声も聞こえなくなるんだ。そういうときには、ムカダテが、カモシカが横にそれれば四つんばいの格好で、右の方とか左の方とか動く格好して、ちゃんと表さねばならないんだ。吹雪とかそういうときはそういうのも見えなくなるから、できるだけ待って避けてはや

【カモシカ巻狩りの配置】



るけれどもね。

我々の時代<sup>\*</sup>は鉄砲は一丁か二丁、経験のある人が持つて行った。みんなが鉄砲持つて行ってもそんなに数は必要ないわけだし。あとはそれこそ食べるものとか、それ以上に荷物が多くならないようにしたんだ。槍は各自が持つて行った。杖にもなるし、カモシカを突く場合もあるから。また、猟の参加人数の少ないときは、巻狩りでも大きく巻くことはできないから、範囲を狭くして。大勢であれば狭くする必要はないから大きく巻くんだ。

#### ◆逃がした場合

カモシカは、沢の方に追ってとることになる。巻狩りが始まったなあと、でも経験者が一番下までやらないうちに自分がとつてやりましょ、なんて真中から入って、途中で突いてやろうとすると、横にそれて対岸の方に逃がしてしまふことがある。ルール違反するのがたまに一人ぐらいいることもあるんだが、自分ひとりで行動すると駄目なんだ。そういうことがなければ、まず巻いたクラ<sup>\*</sup>から逃がすことはないんだ。

逃がした場合、追わなければならぬ。どっちの方行つた、こっちの方行つた、となれば、その近くに行かなければならぬ。

それで、今度カモシカが逃げるわけだ。こつちから攻めるわけだ。そのときに疲れていると、さらに疲れる。早く追いつきたいからね。そういうときは二人でも三人でもおつた場合、先頭の人<sup>\*</sup>がダーツと行つて疲れたら、山側

<sup>\*</sup>我々の時代

語り手が参加した時代。サルヤマのこと。スノヤマではナメゾウのみを使用した。

<sup>\*</sup>クラ

巻狩りをする場合の、獲物を巻く範囲のこと。

にパーツと横になつてよけるんだ。そうすると、次の人が行く。そうして後ろになると、全然楽なんだ。疲れると、次々に替わる。それを三面では「五寸替わり」と言つて、それがまた速いんだ。本当に三人目くらいから後ろになると、いやあー嘘<sup>うそ</sup>みたいに楽なもんだ。全然ほら、道のない所を、雪を漕いで行くわけだから、最初と二人目くらいまでは容易ではないし、三人目くらいからはだいぶ違つて楽になる。カモシカの後を追つているのと、その人の後についているのでは全然違う。当然、追つている間はずっと走つている。

カモシカとの距離はさまざまだ。最初は三、四十メートルかもしれないけど、それも人が早く追いついてとろうとするから、二十メートルのときも十五メートルになるときもある。ところが今度、雪崩の場所に行くと、カモシカが速いんだ。雪崩のよく起きる所は堅い所だから速く走れる。そういうこともあるんだ。

それで実際とるときは、たとえばカモシカが沢の雪の穴に落ちた場合は、がっちり踏みつけてナメゾウ二本くらい足元に敷いて、カモシカの首にタナワ<sup>\*</sup>という丈夫な繩をかけて引き上げる。そうでないと雪だから、足がどこまでも雪にもぐつてしまう。やっぱりカモシカは重いから、引き上げるときに雪に食い込まないように。それで引き上げられないうちに喉元<sup>のどもと</sup>を槍で突いて、それで終わつてしまうわけだ。

#### \*タナワ

シナノキの皮の繊維でつくる頑丈な繩。長さは七尋半（約十二メートル）、各自が必ず持参する。持つて行くときは、特殊なたみ方をして、獲物を解体するときなどに使うキリハ（山で使用する刀）を縛り付け、セナカワやマエカワなど皮を着た後、たすきをかけるように身体に固定し、携行した。P 93 図参照。

## ◆計算した行動

カモシカ狩りの場合、若い衆は先に雪漕ぎしなければならぬ。いくらその日、遅くなっても雪漕ぎはせねばならない。ほんとに大変なんだ。だけでも、朝出たときの元気がすっかりでバッバツと雪漕いで行って、最初だけが、「ああ、これは若い衆だ」と思われても駄目なんだ。朝だけ元気良くて夜暗くなったら動けない、雪漕げないなんて言っていられないし、それが経験差ということ。若いときだと、そんなこと思われるとうまくないからと思つて、一生懸命雪漕ぎする気構えはいいけれども、朝だけではうまくないんだ。

明るいうちに小屋に戻るなんてことは、ほとんどないわけだ。早くとれば次とつて、必ず遅くなると思わざるを得ない。帰りにどこでカモシカが見つからないとも限らない。そうすると、カモシカはあそこに見えるけれども帰ろうなんて、そういうわけにはいかないからね。時間を考えて、今日中に何とかなると。まあ暗くなるから、たいてい二回くらいだな。

とれば、いくら帰りが遅くなつたつて、松明たいまつを持っているからなんとかなる。それに、いくら暗くなつても必ず小屋まで帰らなければならぬ。野宿するなんてことできないし、当然食べなければならぬし、翌日の食糧も小屋でなければいから。そういうことも、みんな計算に入れて行動しなければならぬんだ。

小屋に戻るまでも、食べ物を絶やすなんてことはできない。お腹空いて途中で動けなくなつたなんて、そんなことないように。だから、充分にお餅を

腰につけて持つて行く。小屋に着くまで餅は残っているくらいの支度を毎日していかなければならない。

若い衆は、疲れるなんて大したことないんだ。それは、難儀は当然だけど、お腹が空くと、とにかく大変なことになる、ね。いくら遅くなつたつて、深い雪だつて耐えられるけれども、お腹が空いては耐えることできないんだ。腹減つたらとてもできない。そういつたこと、いろいろあつたもんだ。

また、魚でも、できるだけ小魚の糠漬ぬかづけけとか、味噌漬けとか、塩分の強いもの食べなければ。とにかく汗の出るのがすごいから、そうでなければ身体が持たないから。食べるものが一番大切。

#### ◆松明と焚き火

そうして夜になって、小屋まで帰る途中、暗くなつた場合には松明つけて。若い衆だと、松明持つのはできないんだ。やつぱり中堅というか、少なくとも二、三年経験した人でないと。これがとてもじゃないが簡単じゃないんだ。雪は深いし、松明持つ人は先頭で、当然道はないし、それに風が吹くと毛皮やられるから、松明持つ腕は交互だから、必ず両腕のソデカワ\*は外して背中に入れる。これだけはそうしないと駄目なんだ。突風が吹くと手に持った松明の火で皮が焼けるから、ソデカワは着けてはならない。だから、経験者でない。一年か二年の人だとしてもじゃないが、松明を持つての先漕ぎはできないんだ。

\*ソデカワ

腕に通す狩り装束の皮。サルやアナグマの毛皮でつくつた。P 92 図参照。

もし暗くなつてから若い衆が先漕ぎをする場合は、松明を持つ人が二番目か三番目に付いていて、指示して、いくらか経験のある人がそばにいるようにする。暗くなつたら未経験者は方向も分からないから、そういうことを考えて。明るいうちは大したことはないけれど、夜はなかなか大変なんだ。

松明は周りを照らすというよりは、後ろの人の目じるしなんだ。ここだよ、ここだよというくらいで。我々のときは十七人行つただけでも、そのくらいになると、前の人の笠とかが頼りだから。ただ、ああいう経験は今できることではないしね、さまざまなこと、自然を相手ということとはとにかくね。小屋に帰つてきて、いくらか遅くなつても、やつぱり同じことやらなければならぬ。コマタギがご飯の支度して、二年目の人は手伝いをする。二人でやらねばならぬ。

夜はずつと焚き火は絶やさないといいけれども、なんだって疲れているから、若い衆なんて寝てしまえばとてもじゃないが……。年取った衆だとそんなに無理もしないし、火が絶えるようになれば、薪を足して。逆に目上の人がそういうことはちゃんとやっておいてくれた。

そして、我々その頃は若かったから——夜着て寝る長い着物持つて行って寝るんだけれども——そういうのを足でけつぽつてしまつて焼かないように、杭を三本、足の側に打つて蹴つても着物とかが火に入らないようにしたんだ。焼いてしまえばどうにもならないから、そういうことをやりそうな人の所には杭を立てて。決まりではないんだけど、安全のために立てたんだ。

## 六 山で拝む

### ◆昔の小屋

我々のときは、寒中のカモシカ狩りで、泊まるのは三面川本流の中矢淵沢にあった本拠地一箇所だけ。でも昔は、もつと奥にも小屋があったんだ。だから、二箇所まで泊まり込みだった。一箇所しかないと思うかもしれないが、竹ノ沢の所へ道陸神峰より下がって行くと、スダマ沢の入り口に少し広い所があって、そこが二箇所目。このスダマ沢の小屋は九泊、十一泊の長期のカモシカ猟のとき、中矢淵の小屋を拠点にするほかに、さらにこの小屋で一、二泊し、猟をやったとのこと。小屋場の場所は分かるけれども、我々のときは小屋はなかったな。デジシとりのときにこの場所で一泊したことがある。昔の衆は、山はこなしたもんだった。俺は中矢淵だけだったから、そこから通う範囲だけだ。スダマになると竹ノ沢の水源近くまでみんな歩く。だから当然我々の歩いた範囲の何倍も歩いているわけなんだ。

中矢淵の小屋の修理は村の仕事なんだ。一軒から一人ずつ出で、秋のうち

に小屋をつくっておく。女衆も行った。小屋の大きさはできるだけ必要最小限にする。毎年カヤなど手間が必要だから。我々は若いから、運び方専門だった。

スダマ沢の小屋の修理は、小屋があったことは分かるけれども、その辺りは定かではないな。山の奥で、普通の人なんて行けないから村仕事ではやらなかったと思うよ。

◆自然相手の狩り装束

狩り装束は、下に綿の着物一枚だけで、あとは毛皮だけだ。最初、小屋から出るときは寒いようだけど、ちよつと動くと、だんだん寒さなんてなくなる。とにかく歩くから寒いなんてことはない。普通の人は、もっと温かくすればいいんでないかとか、さまざま考えて下さるけども、雪の中を漕いでると、寒さなんて気にならないんだ。

山の尾根を登ってカモシカを巻いてる間は疲れとかそれほどないけれども、尾根——これは結構雪が深いから疲れる。疲れたって、このままの

【スノ小屋の位置】





格好で身体、動かしていなければならぬ。

俺のソデカワはサルの皮だけど、雪の降る寒中は何でもいいんだ。だけでも、春のクマ狩りになると、今度は降ってくるのは雪でなく雨なんだ。そうすると、サルのは濡れるとペターツとしてしまう。寒中は雪だからそれでも困らないけど、サルのように毛の長いのはどっちかというとうまくないんだ。それでもサル皮なのは、他のがなかなか簡単にみんなの分はとれないから。もっとも着物は濡れない。そうした獣は個人個人でとるんだ。一番好まれたのは三面ではマミ<sup>\*</sup>だけど、とれないと仕方ないから。

ソデカワ、マエカワはマミを使えば理想だ。セナカワは寒中のカモシカの毛皮を使う。寒中の皮なら綿毛もあって温かみもあるし丈夫なんだ。セナカワもそうだし、カワタビとかテカワもそう。寒中の毛皮はすべていいって言うか、秋とか春、寒中以外のものは使っていてゴワゴワするような感じなんだ。また、テカワやカワタビはカモシカの手足の皮を使う。これは絶対的なんだ。カモシカも山中を歩いているから、手足の毛は短い。もっとも手足の部分だから綿毛はないんだ。

狩り装束は、寒中と春先とでは着けかたが違うんだ。寒中は雪が深いから、マエカワ、セナカワの裾はコバカマの中に入れる。入れないとサシコにまで雪がついてくるし、それが体温で溶けて濡れてしまうんだ。春はその心配はないから入れる必要はない。気をつけるのは寒中でも春先でもマエカワ、セナカワはお尻より下にいかないよう帯で固定する。こうすると歩行時に足に

\*マミ

アナグマのこと。三面での呼び名。ササグマとも言う。毛が短い。

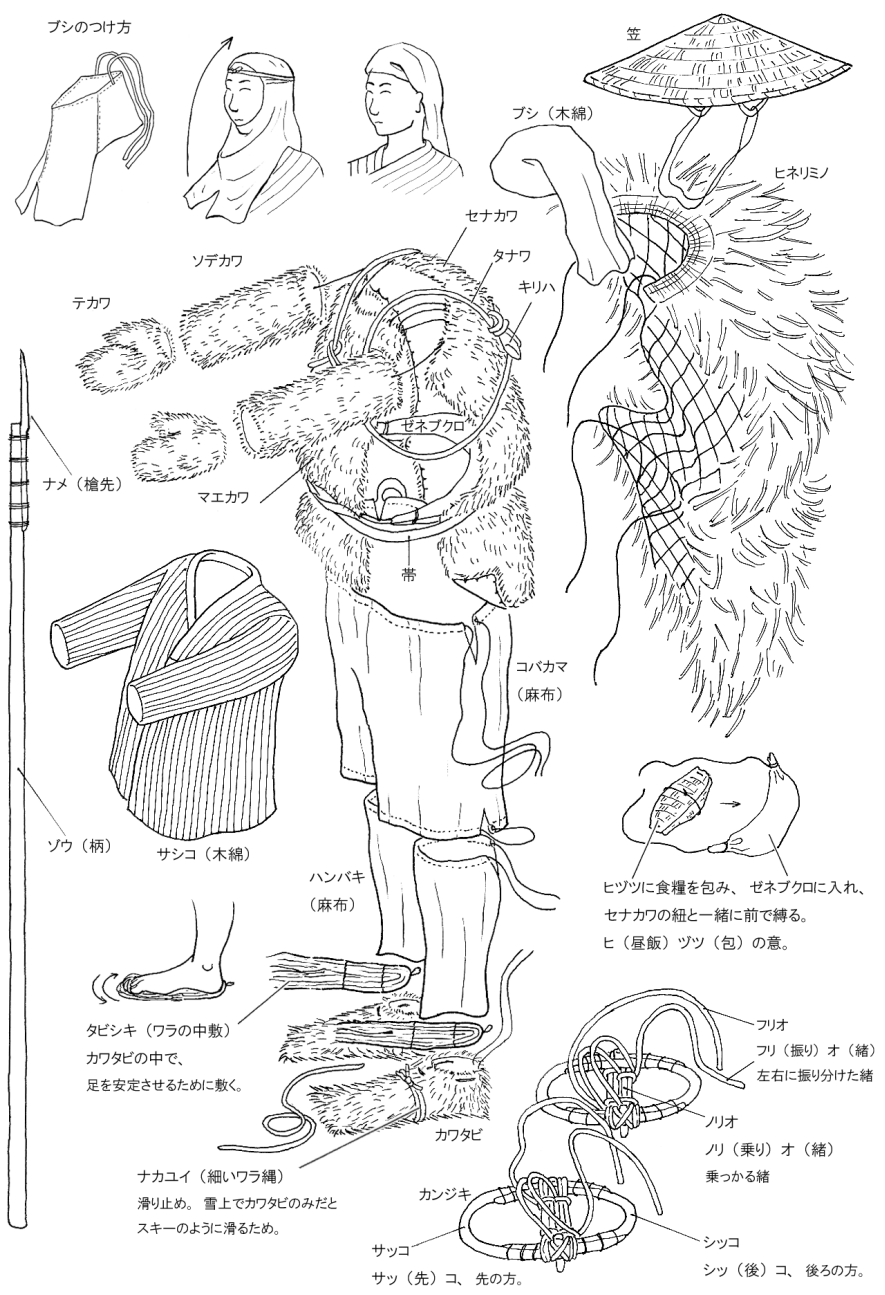
負担がかからないんだ。それにこうするとセナカワの帯でとめた上側に、ゼネブクロを入れる余裕ができるんだ。

ハンバキの裾の扱いも違うんだ。寒中は雪は軽いし深いから足がもぐる。だから雪が中に入らないように裾をカワタビの中に入れる。春はカワタビではなく、ジンベイを履く。堅雪になっていて雪に埋まる心配がないから。春は雪のないところも歩かなければならないし、そうするとカワタビだと、どこかに引つかかって破れてしまうこともある。もったいないから俺は履かないようにしたんだ。そして、ハンバキの裾はジンベイの中には入れない。入れると、多少なりとも歩くときに負担がかかるから。カワタビの場合は、とにかく軽いから負担がかからないんだ。

昔の衆はよく考えたもので、皮でも履物でもとにかく関節に負担かけないように考えてやっているんだ。たとえば雪バカマであれば、中の方空つぼだから、全然膝に負担かからない。履いておつても気にならず楽なんだ。また、袴は、冬は防水にカモシカの油を塗ったんだ。でも、膝に余裕の少ないズボンで冬山の雪の中に入ったらとんでもない。みんな膝の辺りに負担がかかるから、疲れが、雪バカマの何倍も何十倍も負担がかかる。寒中の深い雪はそれこそ疲れて。寒いときだと膝の辺りが凍ってくるから、ズボン関係は駄目なんだ。残雪時の春のクマの時期とか夏や秋ならそれでもいいけど、寒中の山だと、なんだって濡れたりしたら身体に、腰から下に負担かかって。自然を相手の寒中、とてもじゃないが、それで山に入ったならば動くことも歩く

\*ジンベイ

ワラでつくった靴のこと。ジンベ  
とも言う。

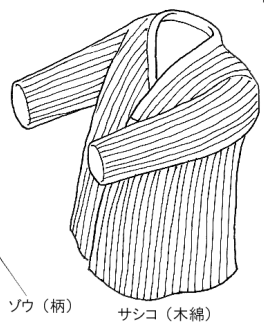
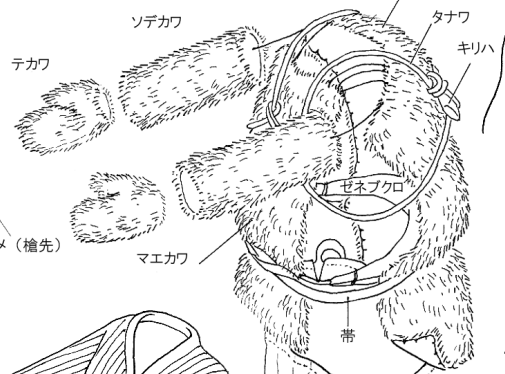


ブシのつけ方



ブシ (木綿)

ヒネリミノ

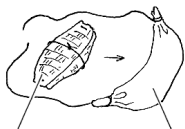


ソウ (柄)

サシコ (木綿)

ハンバキ (麻布)

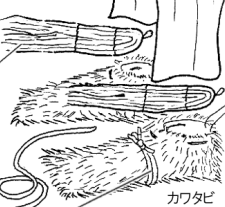
コバカマ (麻布)



ヒツツに食糧を包み、セネブクロに入れ、セナカワの紐と一緒に前で縛る。ヒ (昼飯) ツツ (包) の意。



タビシキ (ワラの中敷)  
カワタビの中で、  
足を安定させるために敷く。



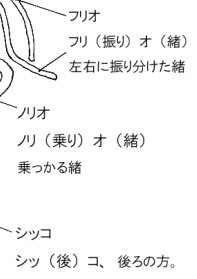
カワタビ

ナカユイ (細いワラ縄)  
滑り止め。雪上でカワタビのみだと  
スキーのように滑るため。

カンジキ

サッコ

サツ (先) コ、先の方。



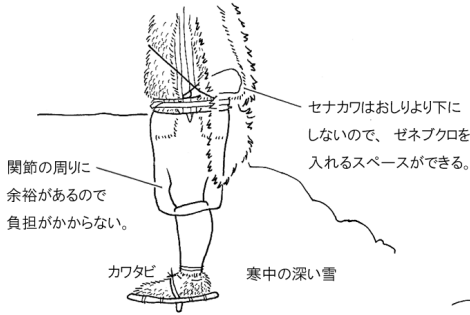
フリオ

フリ (振り) オ (緒)  
左右に振り分けた緒

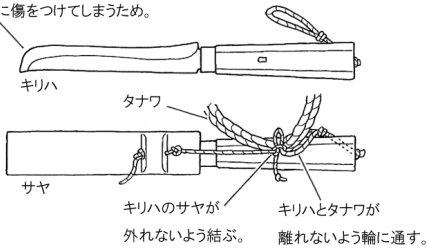
ハリオ  
ハリ (乗り) オ (緒)  
乗っかる緒

シッコ

シツ (後) コ、後ろの方。

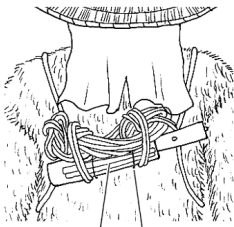


獲物の皮を剥くときは、丸い角の部分を使う。  
先端だと、皮に傷つけてしまうため。



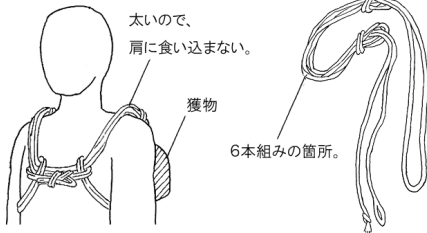
#### タナワの3つの役割

1. キリハと一緒に運ぶ。
2. 一方を輪にして、雪穴に落ちたカモンカの首にかけて引き上げる。



サヤには、松明を麻紐で固定する。麻紐は仕留めたクマの胆の入り口を縛るのに使う。

3. 6本組みの筒所ができるよう折りたたみ、獲物を背負って運ぶ。



こともできなくなる。

まず、第一番にはそういう着るものからいろいろと考えざるを得ない。衣類、履物関係は何より大事だ。笠とか被り物、それから履物、カンジキに至るまで、そういうのよく分かっていると思わぬ事故につながってしまうし、一つ一つ昔教わったこと、習ったことを残しておきたいもんだと思っておる。保管にも気を使うんだ。たとえばカワタビは生皮だし、虫がつきたくてしようがないんだ。だから、普段は囲炉裏の上にある火棚の上で乾燥させて虫食いを防いでいる。かたくなっているから、使うときはぬるま湯に浸けて柔らかくする。

山のことはできるだけ、基礎から教わったり、また経験してないとうまくいかないと思う。自然相手だから特にね。本当はこうだということを知って、ああいうことは何だという本当のことを、ただ、自然の中で体験したこと、そういった経験は全然違うんだ。自然を相手にするということは。

#### ◆山の神様と十二月十二日とアオシシ狩り

十二月十二日、集落では山の神のまつりがあるんだ。この日は、山の神様が狩りをする日だということで、我々は狩りはしなかった。山の神様がこの日にやる狩りというのはアオシシ狩りだ。寒中だから。この頃は旧暦だと十二月になる。だから昔は、正月が来る前にカモシカ狩りをやっていたんだ。狩りが終わってから正月の準備をして。

旧暦では、その年によっては寒の前半の十五日間、小寒の時期に十二月十二日が入る年もあるんだ。すると我々の行なうカモシカの猟期と重なる場合がある。だから、その日に山に行くのは避けている。寒中という時期を考えればちょうどいい頃だけれども、自分たちがアオシシをとるよりも、やはり山の神様は大事だからおまつりをして、そして当然山では猟はしない。

けれども、そうであつても、山に入つてからの途中だということになれば、それまでは言わないはずだと思うな。たとえば八日の日に登つてスノ小屋に着いて、八日九日十日十一日と猟をしても、それこそ十二日が休みだということはないはずだ。やっぱり登つた日が十二日でないから。だから、そういう場合では十二日でも当然、活動はする。

ですから山の神様の十二月十二日に、これから山にアオシシ狩りに集落から出発すると、それは考えてきたけれども、入つてからの途中になつたつて休むということは、途中だからね。奇数日のなかの途中。厳しい、寒さの一番厳しいときだ。

山では泊まりの日数は奇数と決められているけれども、人数は偶数奇数は関係ない。ただ、十二という数は大里十二山の神様の十二に敬意を表して使わないようにして。それは我々の行ったサルヤマでなくてスノヤマの場合だ。サルヤマならそうでもない。それでスノヤマのとき、どうしても人数が十二になる場合は十一人と一人とか、それと犬も連れて行くから、犬も一人として十二人の場合は犬も入れて十三人、そう言ったんだね。

犬は、巻いたクラから逃がすような場合になるとカモシカを追わせるんだ。すると、犬を気にして、また、犬が後ろから行って咬<sup>か</sup>んだりなんかするから遅れるわけだ。クマの場合は逆に駄目なんだ。かえって速く逃げてしまうから。

### ◆ 拝む場所と方向

親方は当然、毎朝、小屋の奥の大柱に山の神様祀つてあるから拝んでいるけども、あとは別に、その他の衆は山に入れば、ここは拝む所だと昔から決められていた所で拝むだけで。

山で拝むことを「サンナイ」と言つて、その拝む場所を「サンナイダイラ」と言つたんだ。「サンナイ」ということは拝む、場所は「タイラ」で。そして、どこに何のために拝むかというね、山の神様に手を合わせて拝むということなんだ。

それはどういう所かという、場所はまず部落から登って行き、いよいよここから山<sup>\*</sup>だよという所で拝んだ。あと、山をズーツと行つて、いよいよ狩り場に登る、その箇所とかね。それから今度、奥の方行つたら獵場——獵をする前に拝む所とか。そういう所をちよくちよくというか、その場所その場所に行つたら拝むんだ。

また、山行つたら、いくら疲れても、そこまで行つてから休む。そういう場所が決まっていた。それはどこの山でも言えるけれども、そこ行つたら休

\*ここから山  
山境のこと。P 20 図参照。

む前に必ず山の神様を拝む。そして、そこまで行ったら、そこで次の人に替わる。そういうことになるんだ。三キロくらい行くと休む。ただ、集落より三キロ弱の最初に休む元屋敷対岸の田んぼのそばは、低い所だから拝むことはしない。

それからずっと奥行ったら、山の神様祀つてある所が見える所もサンナイする。そこで拝む所だということ。そういう場所がある。サンナイダイラと言うのは山の神様を拝む場所、ということなんだ。あと方々行つたとき拝む。何箇所というのは分からない。やっぱり先輩がいるから、そこで拝むということは絶対ということ。

拝む方向というのはある。あくまでも山の神様は上流にいるということ、そっち向かって拝む。こっちに鎮守様あるから下流に向かつて、ということではない。あくまでも上流に向かつて、山の神様は自分より上に、自分の登つて行く上の方に、上流にいるということ。たとえば、尾根にいるときでも低い方でなくて、より高い方に向かつてということ。そういうことなんだ。猟場でも拝むけれど、いざ狩りをして急いでいるとき、そのときはちゃんと笠は脱がれないから、笠の端に手をかけて脱いだような格好していて頭を下げるだけでいいんだ。それでサンナイしたことになる。巻狩りしてカモシカが逃げているときに笠を外して拝んでいく、そんなわけにはいかない。

また、猟に行った人だと、柏手は絶対に打たないんだ。猟もそうだし、山の神の関係拝むときは、柏手は打たない。なぜかというと、寒中が主だから



「パン」とやると、雪崩が危険なんだ。でも、「パン」という振動で雪崩が起きるなんて考えられないし、どうだかなと思うけども、山ではそういうわけで注意すべきということなんだ。ということはいしんと雪が降って木の枝から雪がパタンって落ちて、いや、それは音ではないんだけど、それで雪崩が起きるんだ。そういうことで、手のひらをこう擦るだけで柏手は打たないんだ。

カモシカ狩り、あれは経済的、猟の難易度的にはそれほど大したことではないんだけど、寒中だから危険なんだ。だから山の神様にお願ひするんだ。危険のないようにとね。主として雪崩だ。クマのときは獲物のこともあるけど、カモシカはそうではないんだ。巻狩りするときも、話し合いで配置が決めれば、それぞれの所で見なが拝むんだ。過ちや怪我のないようにと拝む。各人で、山での安全をお願ひするのです。

# オソ

オソあるいはオドシと呼ぶわなは、三面における狩猟法の一つである。オソには、クマの捕獲のためにつくる大型の「オソ」とムジナ、ウサギなどの小動物をとる小型の「ムジナオソ」があった。特に前者は、クマの換金性の高さ等によって重要視され、オソをかける場所（オソ場あるいはオドシかけ場）の権利は、家ごとに代々受け継がれてきた。オソは、吊り天井式の巧みな構造を持ち、周辺の自然物を材料につくられる。秋、仕掛けたオソを見回することは、山人のやまど仕事であり、楽しみでもあった。

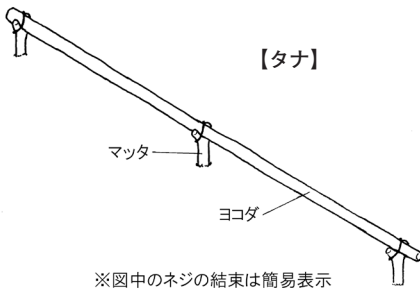
## 【作業手順】

### ● タナをつくる

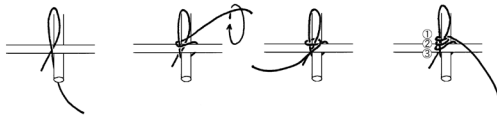
① オソをかける場所の地形に合わせて、「タナ」をつくる（P180参照）。

二股になっている木を用いた「マツタ」三〜四本を立て、「ヨコダ」を渡す。

マンサク等を用いてネジをかけてマツタとヨコダを結束する。「ネジ」の材には細めの木の枝が適し、まっ



### 【ネジのかけ方】

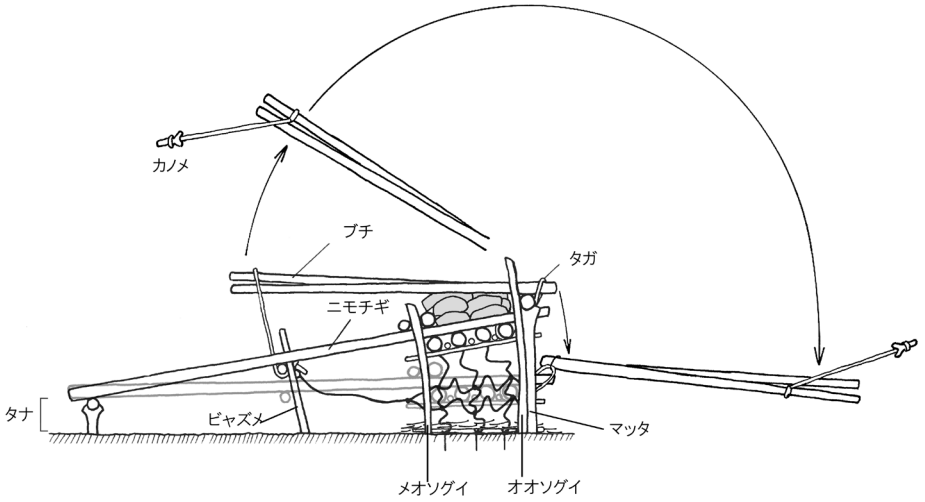


先の方を内側にして折らずに曲げる。

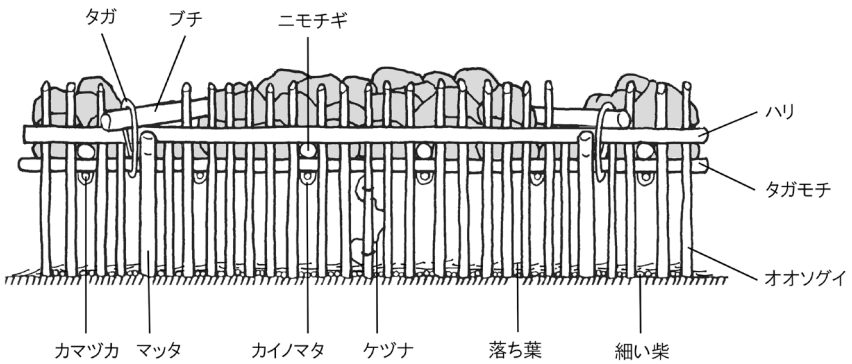
材をくり、ねじりを加え、ピンツといわせて下側へと巻く。

同じように2〜3回巻き、根元の方は適当な箇所につっかけておく。

【オソの構造】



【横から見たオソ】



オソの材料一覧表

	名称	数量(本)	長さ(cm)	直径(cm)	
本体部分	マッタ	2	75	10	
	ハリ	1	270	10	
	タガモチ	1	270	10	
	イシモチ	1	270	10	
	クイヨセ	1	270	10	
	ニモチギ	4	270	10	
	スゴ	3～4	10	10	
	オオソグイ	30前後	135	2～3	
	メオソグイ	30前後	105	2～3	
	床に敷く柴	適宜	70～80 <sup>※1</sup>	2～3	
仕掛け部分	コロバシ	1	15～20	2～3	
	ビヤズメ	2	110	2～3	
	ブチ	2	210	10	
	ウデギ	1	90	10	
	タガ	2	完成時直径約30	—	
	ケヅナ (ブドウヅルの皮)	1	適宜	—	
	カノメズワ (ブドウヅル)	1	適宜	—	
	カノメ	1	—	—	
	結束材	ネジ材	90前後	—	—
	重石	石	800kg前後	—	—
	垣柴	適宜	—	—	
タナ側の材 (必要な場合のみ)	マッタ	3～4	地形に合わせる	10	
	マッタを支える杭	適宜	地形に合わせる	10	
	ヨコダ	1	270	10	
地面が岩盤 などの場合	台となる丸太	7～8	30～40 <sup>※2</sup>	10	
	台の上に渡す丸太	3～4	270	10	
	束ねて使用する柴	適宜	—	—	

※1 オオソグイとメオソグイの間隔より広がる幅

※2 束ねた柴と柴の間に収まる長さ

すぐなものより湾曲したものの方がねじる力をかけやすい。

● マツタを立て、ハリを渡す

② タナに向かい合わせて「マツタ」二本を立てる。マツタの高さは五十〜六十センチ、間隔は二メートルほど。これでオソの高さと長さが決まる。なお、オソの幅は二尺（約六十・六センチ）が目安。

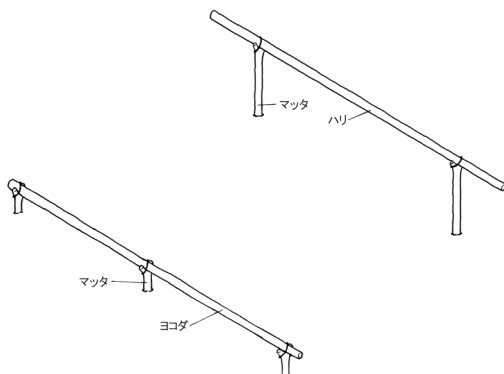
③ マツタに「ハリ」を載せ、ネジでマツタと結束する。ハリはなるべくまっすぐな木を使うが、曲がっている場合は、曲がりを横ではなく天地になるように載せる。

● オオソグイを立てる

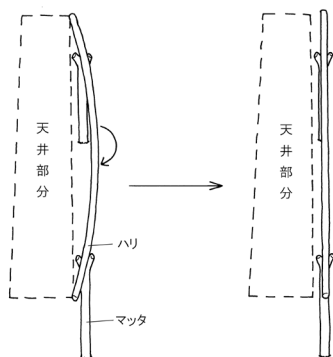
④ 立てたマツタの内側に「タガモチ」を置く。タガモチはオソの基礎の基準となるので、できるだけまっすぐなものを使う。ハリとタガモチを基準にして「オオソグイ」三十本前後を立てていく。材の根元側を下に細いものと太いものを交互に立て、材が曲がっている場合は曲がりを内側に向くようにする。

⑤ オオソグイを立て終わったら、左端から右へとハリにネ

【マツタ・ハリとマツタ・ヨコダの位置】



【曲がったハリを使う場合】



ジで結束していく。このとき③で縛ったネジの元も一緒に縛る。結束は一本おきに細い方に施す。これにより強度を保ち、同時に手間と材料（ネジ）を省く。

●天井部分をつくる

⑥天井部分を載せる台を用意する。

オソ本体の内側で作業の邪魔にならないところ二ヶ所に、それぞれ石を二つ置く。その石の上に「ブチ」(⑭で使用)を一本ずつ渡して台をつくる。これにより台の下に隙間ができネジがかけやすくなる。

⑦天井部分の作製に入る。

台の上に「タガモチ」と「スゴ」二〜四本を並べる。スゴとスゴの間の隙間には細い木を入れる。これによりオソにクマがかかって暴れたときにも、天井に載せた重石のうち小さな石がパラパラ落ちることを防ぐ。

⑧タガモチとスゴ、ヨコダの上に、「ニモチギ」四本を渡す。

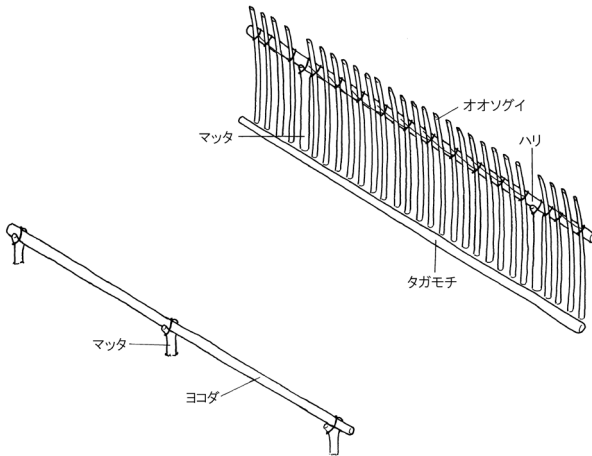
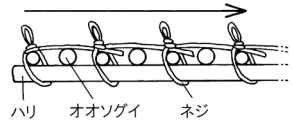
中の二本は間隔を狭く、両端の二本は中の二本よりかなり広く配置して、安定させるためにそれぞれヨコダと結束する。

⑨ニモチギの上に「イシモチ」を載せる。これにより完成

【オオソグイの結束】

【オオソグイの結束が終わったところ】

左から右へと結束していく。



時にある程度傾くニモチギから、重石がずり落ちるのを防ぐ。

⑩スゴの下、ニモチギの四本と間隔が広い所の中間辺りの位置ニカ所に、「カマヅカ」計六本を配置する。

⑪ネジで、カマヅカとニモチギ、および各々タガモチ、スゴ、イシモチを結束する。

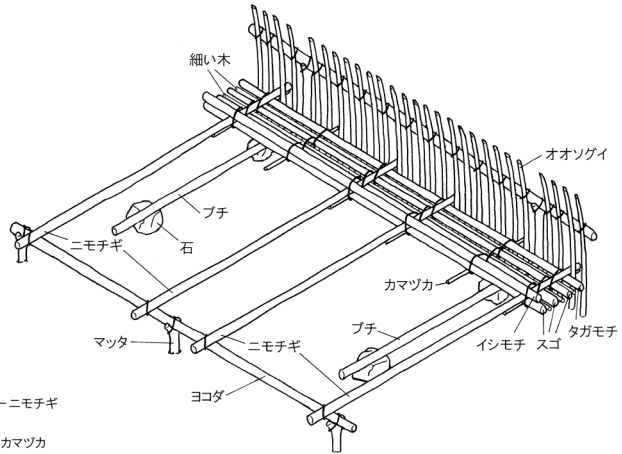
結束場所はオオソグイ側、メオソグイ（⑫参照）側、中央部分のニカ所。結束は、オオソグイ側がカマヅカ、ニモチギ、タガモチ、スゴ（タガモチ側）。メオソグイ側がカマヅカ、ニモチギ、スゴ（イシモチ側）二本、イシモチ。中央部分がカマヅカ、ニモチギ、スゴ（中央部分）二本とする。この結束法は「カイノマタ」と言う。結束順は先にオオソグイ側、次にメオソグイ側、最後に中央部分。中央部分はクマの背が当たるため、クマがかかって暴れた場合に隙間ができるおそれがあり、特にしっかりと結束する。

●クマを逃がさない工夫をする

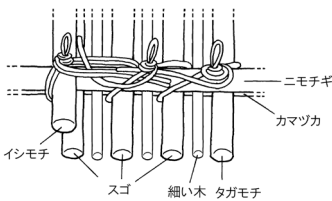
カマヅカは細めにする

——天井部分とクマの背の隙間をなくす

【天井部分ができたとこ】



【カイノマタ】



クマがかかると、重石を載せた天井部分が落ちる。カマヅカは細めにしておくと石の重さでたわみ、クマを押しさえつけてくれる。太いと重さを支えて、クマの背に載るかたちになって隙間をつくり、逃げられてしまう。

クイの向きと本数を揃える

——側面とクマの隙間をなくす

オオソグイとメオソグイの曲がりの向きを同じにし、かつ平行に本数を合わせて並べることで、かかったクマと隙間ができないようにする。

地形に合わせてタナをつくる

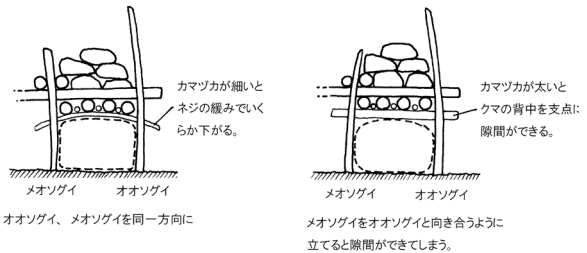
——落ちた天井と地面の隙間をなくす

〈タナ側が崖などでオソ本体より低くなる場合〉

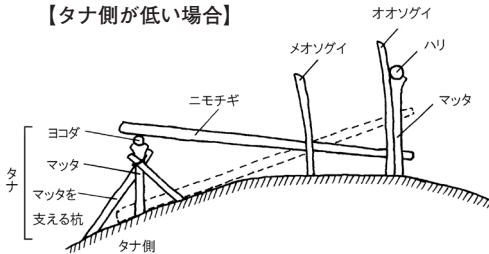
タナは、オソをかける場所が、両側が崖の所や尾根のような、オソ本体より低くなる場所につくる。タナ側が低すぎると、クマがかかって天井が落ちた場合、ニモチギが浮いて隙間ができ、そこを掘って逃げられてしまう。天井ができるだけ平らに落ちるよう、タナ側のマツタの高さを調節する。高くマツタを立てる必要があるときは、前後側から支えの杭を立て、ネジでマツタと結束する。

〈タナ側が山などでオソ本体より高くなる場合〉

【カマヅカ等の注意点】



【タナ側が低い場合】



タナ側が低い場合、タナがないと反対側のニモチギが浮いて下に隙間ができるので、タナをつくる。



山がタナの役割をしているため、タナは必要ない。ただし、この場合にまっすぐなニモチギを使うと、天井が落ちたときに隙間ができて逃げられてしまうため、その場所の傾斜に沿う曲がった材を使う。

●天井を上げてブチをかける

⑫天井を縄で引き上げる。

天井部分を引き上げるときに使う縄は、「上げふじ」と言っており、あらかじめシナノキの皮でつくった縄を二本用意しておく。長さは、各々約一尋半(約二・三メートル)。

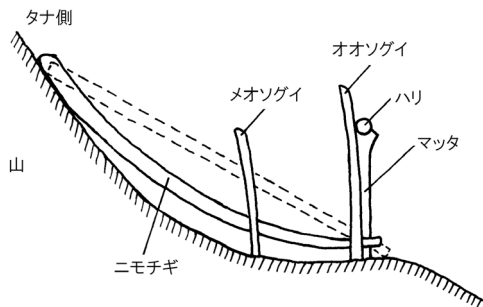
縄の片方をそれぞれ輪にして、その輪を両端のオオソグイに一本ずつ引っ掛ける。そして縄のもう一方をタガモチにくぐらせて、オオソグイに沿って上に引っ張り上げる。ニモチギがハリについたら、その状態でハリに縛りつけ仮止めする。

⑬タガを二つつくる。

「タガ」はブドウヅルで、タガモチが輪の中に入るようにしてつくる。ブドウヅルがない場合は、ネジにする木を切るときにタガ用を切っておく。

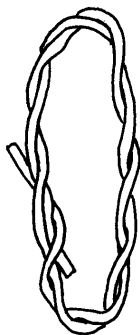
⑭タガとブチをつなげる。

【タナ側が高い場合】



タナ側が高い場合、ニモチギにまっすぐなものを使うと下に隙間ができるので、斜面に沿ったものを使う。

【タガ】



タガモチが入ったタガにブチをくぐらせ、ハリの上に載せる。ブチを載せていた石はオソ本体から出して置く。

●仕掛け部分をつくる

⑮ブチを交差させて上になるブチに「カノメズワ」を結び、その下端に「カノメ」を結びつける。カノメズワは、遊びがないよう強く張る。

「スワ」とはブドウヅルのことを言う。

⑯内側二本のニモチギに「ウデギ」を縛る。

縛る際は、遊びがあるよう緩くする。これにより、めつたにないがコロバシが外れてもカノメが外れなかつた場合にも、ウデギが回転してカノメが外れる。

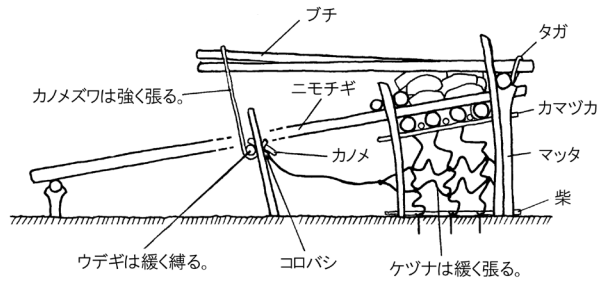
⑰「ビヤズメ」二本を土に挿してウデギに立てかける。

挿す際は、ハの字に下の方を上の方より広くする。

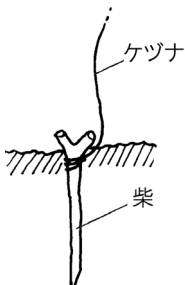
⑱「ケズナ」を二〜三列・二〜三段の網状になるように張る。

上はスゴに、横のオオソグイ側はオオソグイに、下はケズナを一本ずつ二股の柴の枝に縛って地面に挿し込む。ケズナは緩く張る。メオソグイ側は仕掛け部分につなげるため「コロバシ」に結ぶ。コロバシはビヤズメに接する部分を平らに削って安定させ、長さはビヤズメよ

【ケズナ等の注意点】



【ケズナと柴を差し込んだ地面】



り両側が五センチ外に出るくらいにする。

⑲ ケヅナを結んだコロバシをビヤズメに渡し、ウデギとコロバシの間にカノメがかかるようにする。カノメは二股のものを使用し、コロバシが外れてブチが跳ね上がってもカノメズワからカノメが外れないようにする。これで仕掛け部分は完成する。

後の作業中に仕掛けが外れないよう、コロバシを下から抑えるように二本の棒を地面に挿し、仮止めをする。石を載せているときに外れると危険なので必ず行なう。

●仕上げる（床・重石・側面・周囲）

⑳ 床部分（地面）を整える。

オオソグイの立つ方からメオソグイを立てる方へ向けて横に柴を敷きつめ、その上に落ち葉を敷いて柴を隠す。

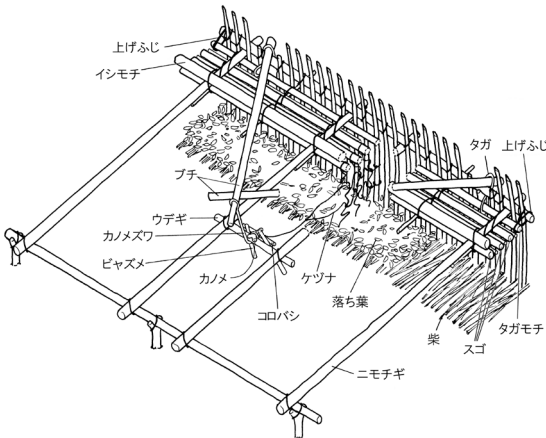
㉑ 天井に重石を載せる。

下に大きい石を並べ、小さい石は上に載せる。総重量は八百キロ以上。

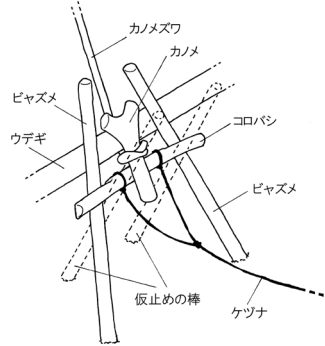
㉒ メオソグイを立てる。

「メオソグイ」二十本前後を立てていく。材が曲がっている場合は、オオソグイと同じ向き、同じ間隔で平行

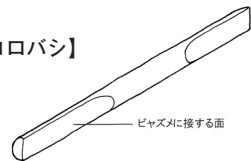
【仕掛け全体の構造】



【仕掛け部分】



【コロバシ】



にして立てる。メオソグイは材の根元側の太い方を上に  
して、天井が落ちるとき、引つかからないようにする。

②③クイヨセとイシモチを縛る。

メオソグイの外側に「クイヨセ」を渡し、両端と中央  
部の四ヶ所くらいをネジでイシモチと縛る。メオソグイ  
を挟む格好になるので、縛る際は緩くして、天井が落ち  
るときの抵抗を減らす。

②④オソ本体の前後（入り口）に柴を立て、罨だとクマに気  
づかれないようにカモフラージュする。同時にクマがオ  
ソの入り口から脇に逃げるのを防ぐ。これを「垣柴」と  
言う。

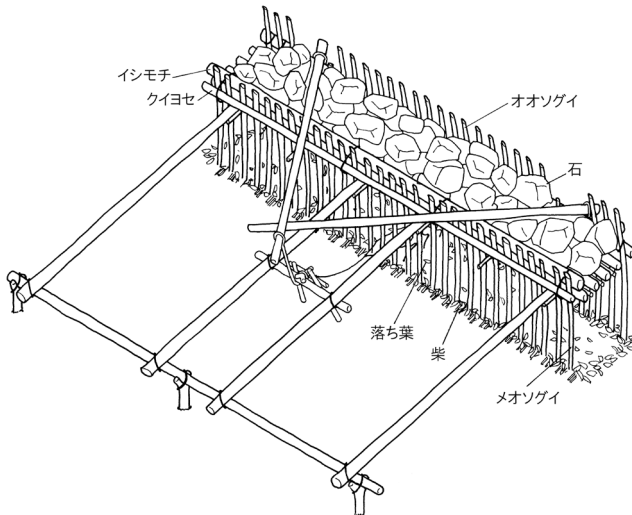
②⑤①⑨で施した仕掛けの仮止めと、②⑬で施した上げふじの仮  
止めを外す。これでオソは完成する。

●岩盤の上にオソをつくる場合

岩盤の上などはマツタやオオソグイ、メオソグイが地  
面に挿し込めない。この場合、土の代わりに柴を十  
十五本丸めて束ねて九〜十二尺の長さにして、所々ネジ  
で縛っておいて、そこに杭を挿し込む。

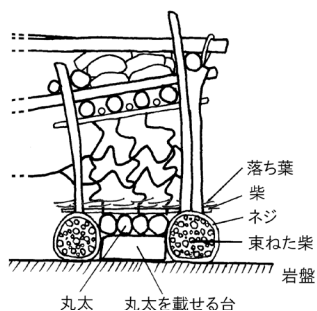
丸めた柴は直径三十〜四十センチになり、その分、オ

【クイヨセを縛ったところ】



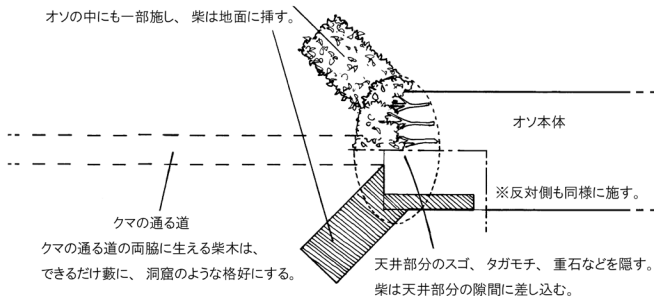
ソの床と隙間ができ、天井が落ちたときにその隙間からクマが逃げてしまう。そこで、隙間ができないように、岩盤の上にオソの幅の丸太を横に七、八ヶ所置いて台にして、その上にオソと同じ長さの丸太数本をオソの幅に合うよう載せて三、四ヶ所スワやネジを使って結束する。その上に横に細い柴をびっしり並べ、柴を隠すために落ち葉を敷いておく。また、ケヅナは下の丸太か床に敷いた柴に縛る。

【岩盤上のオソのつくり方】



【垣柴】

クマがオソの脇にそれないようにしつつ、マツタ、オオソグイ、メオソグイを隠す。オソの中にも一部施し、柴は地面に挿す。



■オソの高さとハリの曲がり

クマのオドシは完成時、人の膝ぐら<sup>ひざ</sup>いまでの高さ、多少の高低は構わぬが、あまり高くしないんだ。

またクマは、高いと、低いよりは警戒せずに潜るけれど、パスツと天井が落ちたとき、ぎゅつと踏ん張るんだ。人のヒザまでくらの高さ以上になるとクマも立ったまま入るから、踏ん張る力も全然違う。そうなる前の方は落ちた天井で塞<sup>ふさ</sup>がって先に行けなくなるから、必ずバツクして逃げられる。

だから、オソはクマがヒザを折って入るくらいの高さにする。そうすると踏ん張れないし、天井が落ちたとき、鼻をガツンと土につくから窒息するんだ。低いということは、それが一番。そういうふういろいろ計算されておる。

ハリはある程度まっすぐなのがいいけど、多少は曲がっている場合がある。その場合には、曲がりを横にすると、後でつくる天井部分との間に隙間ができてしまう。だから曲がりを縦方向にして、下に向くようにする。これだと横方向の隙間はできないから差し支えない。

なぜ横の曲がりか駄目かというと、まっすぐに天井が落ちた場合、曲がった所に隙間ができる。そこはクマが手に負担かかってないから、その杭を払われて、だんだん掘って、掘れば掘るほど楽になって、そこから逃げる。そういうことやらせないために。

どれをとつても大事だけれども、一番は隙間をつくらないということ。実際にクマはすごい力だからそれに耐えるようなこととしておかないと逃がす率が高いんだ。

■杭の向きと立て方

マツタ、オオソグイ、メオソグイと、杭は三種類あるんだ。杭を立てるときは、できるだけがっちり土に挿し込む。普通は元<sup>もと</sup>の方を下に、末<sup>すえ</sup>の方を上にするけれど、メオソグイは元の方を上にする。本当は元が下の方がいいんだけど、メオソグイはイシモチとクイヨセとで挟まるから、下が大きいと天井が落ちるとき、途中で引っかかることはないと思うけれど、そんなことのないように。元と末って言う

のは、草木の生長の方向、根元と梢こすえのこと。

オオソグイとメオソグイの曲がりと同じ間隔、同一方向になるようにする。両方の杭の曲がり向き合うように立てると、真中に広い所——余裕ができて隙間ができ、そこはクマが身体を動かせる余裕があるから、もがいているうちに、だんだんと隙間が大きくなる。そして、身体が動くから杭を払ったり地面なんか掘るようになると、そこが軽くなって、逃げられてしまうんだ。

だから、昔の人は、「針の穴ほどの隙間があつてもうまくない」と言ったものだ。駄目だと言つた。どこかに隙間があつて、そこが軽いとクマなんてすごい力だから、その箇所をだんだん掘つて、逃げられてしまう。オソの高さやハリの曲がりだけじゃなく、全部計算してつくらないとうまくないということなんだ。俺、そのようなこと、親父から厳しく言われたんだ。

### ■ネジとネジの締め方

ネジの材は、三面で一番いいのはマンサク。それ

が一番好まれる。ネジには最高だ。三面だと、その木は結構あるんだ。似たいいい材はあるけれども、量的には全然比べものにならないな。とにかく一番駄目なのは、中に芯しんのあるやつなんだ。中にずーっと白いのがあるようなのは駄目。

オオソグイは、できれば一本ずつ締めていけばいいんだけど、それだとネジの数も多くなるし、毎年やっているから大変なんだ。オオソグイは細い杭を打ったら次に大きい（太い）杭と交互に立てる。ハリと結束するときは、細い杭を縛つて、次の大きい杭を入れて、その次の細い杭に縛る。そのように交互にネジで締めれば、大きい杭は当然動かないし、細い杭もがっちりするわけだ。ネジはひと巻きふた巻きと奥の方に締めていく。

これを一人でする場合は、左端から右へと、ずーつと縛つていくわけだ。二人の場合は一人は左端から、もう一人は真ん中から右へ、右へとかけていく。

なお、ネジ以外の材料は、傷んだら取り替えるけれども、そうでなければそのまま何年も使う。かなりは持つんだ。ネジは毎年かけなおしていく。

## ■細かいカマヅカと緩むネジ

太さから言っても、鎌の柄ぐらだからカマヅカって言うんだけれども、我々が農作業に使っている鎌の柄よりは長い。まず鎌の柄にだいたい似ているからカマヅカって言う。スゴとかは大きいのがいいけども、カマヅカはそんなに大きいのは駄目なんだ。

ネジは、いくらがっちり締めても、重石を載せると、その重さである程度緩んで、いくらかは隙間ができる。これは悪くないんだ。なぜかって言うとね、カマヅカが細いでしょ、獲物がかかって天井が落ちると、その下のカマヅカがいくらか下がるんだ。すると、カマヅカは細いから獲物を包むような格好になる。カマヅカがクマの身体に沿って、重石の重さをしつかり伝えて押さえつける。オドシでは、それもひとつ大事なことなんだ。

だから、オソの高さも、重石を載せるといくらから下がることも考えてつくらねばならない。荷物を上げて、ヒザよりちよつと高いくらいにまとめるようにするんだ。

もし、カマヅカに大きいの使って、これがガンと

していればネジは下がらないし、クマの背中が支えになり、包むような格好にならないし、他の部分に重さが伝わらず軽いから、そのままになっていると脇わきのあたりに余裕ができて、そこ掘れば手、足の部分にだんだん隙間ができて、逃げられてしまう。だから、カマヅカはやつぱり細いのでなければ駄目なんだ。

「カインノマタ」はクマが中で騒いでも、天井部分の材の配置がバラバラにならないような縛り方なんだ。バラバラなると、どこかに隙間が空くというおそれがあるから。隙間が空くと、荷物にしている石がそこに入って、だんだん騒ぐと、その石の大きいのが下がってさらに隙間ができる。ただ材を押さえただけでなくて、そういうことも考えてつくる。どれひとつとっても、あれくらいの猛獣だからいい加減なことは駄目なんだ。

## ■タナについて

オソ本体の地盤よりも高いものをつくる、山がないからその代わりにつくるのをタナと言う。また、



オソに限らずちよつと高みにつくる、少しでも高くつくるということをタナと言った。

タナ——漢字では「架」の意味が適当と思う。タナは尾根など、オソ本体よりタナ側が低くなる場合につくる。このようなオソを「タナオソ」と言う。オソは大体尾根にかけるけど、横——斜面の場合もあるんだ。それを「横オソ」と言ったんだ。

### ■ブチの役割

ブチをタガにかけるときは、ハリの真上にくるようにかけると、仕掛けが外れてもブチの重さと釣り合って、天井が落ちないことがある。だから、ちゃんと重石の重さがかかるよう、タガはハリの真上でなくて、少し外側にずらした所にかける。

それで、とにかく仕掛けが外れると、このブチというのは飛んで行って、とんでもない所まで、谷間のどこかまで飛んで行ってしまふ。だから、タガに細いネジで縛っておかねばならない。そうすれば飛んで行かないんだ。

ブチの材はそんなに大きいのは好まれないけれ

ど、あんまり若いのは駄目なんだ。若いと荷物力——石の重さで曲がりやすいし。どっちかという古い方がいいんだ。

ブチの元には、力をかけておかねばならない。ブチの元の所に力がかかると、タガから「くつん、くつん」と音がする。それで力がかかったというのが分かる。すごい重さの石が上がっているから、タガモチとかスゴは下がりがたくてしようがないんだけれども、その力をタガとブチの元にかかるようにするんだ。尾根はどんどん風が吹くから、ここに力がかかってないと、ブチが揺らされてカノメが外れることがある。だから、ケヅナにウサギがかかっても外れないくらいの力をかけるようにする。その辺のこと、よく分かってないと。

うちの親父、友人と共同でオソ五ヶ所かけたんだけど、都合でつくるとき行かれず、見るとき一人で行ったら、四ヶ所がカノメが外れて天井部分が落ちていたんだ。山に行つて、暗くなつて帰り遅ければ、家の人もクマがとれたと思うけれども、そうではなくて直していたんだ。それで懲りたらしくて、親父

とつくつてたときには、うんと言われたんだ。

### ■仕掛け部分での注意

仕掛け部分には細心の注意を払う。

ビヤズメは挿すとき、二本の間隔を、下の方は上より広くしておく。クマがケヅナを引つ張った場合、途中まで行けばビヤズメの間隔が広がっていくから、コロバシのどちらかの端がパタンと落ちることを考えてあるということ。

だから、そうなるようにコロバシの長さにも気をつける。長さはコロバシをビヤズメに配置したとき、ビヤズメから五センチ外に出るくらいの長さにする。あんまり長いと、ケヅナを引つ張ってもどちらかの端がビヤズメからパタンと落ちたりしないから。

コロバシのビヤズメに接する部分を平らに削って接する面を多くしておくのは、安定させるためでもあるし、こうするとコロバシを仕掛け部分にカノメと配置したとき、多少しなるようになるから台風が来ても何があっても自然の力で外れるようなことはない。クマの力で初めて外れるようになる。

カノメにY字型のものを使うのは、仕掛けが外れたとき、カノメが棒状のものと、勢いでカノメズワから外れてどこかに飛んでいってしまう。二股のものであればそういうことも防げるわけだ。

ケズナはスワの皮をある程度の太さにして使ったけれども、後からは番線（針金）を使ったな。ケズナを張るときはオオソグイの側、メオソグイの側もあまり空けると良くないから五センチくらい。両端から潜ることはないけれども、そういうことを考えて両端は狭くしておく。あとは真中は四角になるようにすれば一番良いわけだからね。

ケヅナは、クマがオソのどちら側から入るか分からないから、オソの真中に張る。そして、張るときはバアンと張らないで、ある程度緩くしておく。なぜなら、もし、バンバンと張つてあると、クマがオソに入つて、先行こうと思つて、頭がケヅナにかかつたときに、そこで天井が落ちてしまう。こうなると、まだクマは頭だけしかオソの真中に来ていないから、クマの背に落ちた天井が前に傾いて、前が塞がって先には行けないし、そうするとバックするん

だ。だから、頭だけでなく、身体全体をオソの真ん中までやって、やった時点でパタンと落ちるようにケヅナの緩さを調節するんだ。そうすると、落ちた天井が傾くことはないし、バックするのもなかなか容易でないわけだ。

### ■重石の重さ

オソの天井に重石を上げる。それには大きい石から下に並べ、こまいのはできるだけ上の方にする。天井全体に同じになるよう石を上げる。必ず一方からクマが入るということであれば、入る側だけを重くしておけばいいけど、どっちから来るか分からないから。

オソに使われる石、八百キロ近く、それだけの石を集めるというのは、場所によって大変なんだ。なかったら下の谷や遠くから担いで集めなければならぬ。

### ■クマの習性とオソを自然物に見せる工夫

オソは秋だから、クマは木の実が一番主な食べ物

なわけだ。ブナ林でもナラ林でもそこに食べに行く。たいていは林で食べて、お腹が一杯になれば、主に見通しの良い尾根でちゃんと休むわけだ。そのとき、好んでオドシの中に入ろうなんて思っただけ——これは変なものと思って入るんでなくて、できるだけ自然のような形にして。これは人がつくったんで言うのではうまくない。自然界にあるものと違う格好しておくとか警戒して入らないんだ。

また、クマとかそういうものは、藪やぶの中、藪の中と好んで歩くんだ。クマは猛獣だから、何も怖くないから堂々と歩くかと思うけども、そうでないんだ。柴の根の所に潜ったり、あんまり身体を見せないように歩く。とにかく警戒心強いから、ガラツとした所は歩かない。

そういうことを考えてオソの床を整えたり、垣柴をつくる。まずオソの底、床の部分にできるだけ細かく柴を敷いて、クマがかかったときに地面を掘れないようにする。そして、今これつくったんだという格好を隠すために、その上にその辺の落ち葉を敷いて見えないうようにしておく。

たいていクマの通る道というのは決まっています、そこを見計らってオソをつくる。それが何よりも大事なんだ。このクマの通る道は、オソをつくるために自分たちも毎年通るんだけれども、オソの二、三十メートル手前から道の両側の柴を生長させてできるだけ長くなるようにして、洞窟のような格好になるようにしておく。

昔から、毎年そういうこと考えて。高い柴はない方が我々は歩きやすいけれども、この通る道はそのように育てる。そして、隙間があると感じさせるために広くても、オソの幅の三分の一くらい、できるだけ狭い道になるようにしておく。できるだけ藪にして、藪にしても低く、クマから見ても、本当の道の真ん中とかそんなところはさ、ズーツと隙間あるような格好にしておかねばということ。

それに合わせて、オソの両入り口も狭くして、手前の道と同じだと感じさせるように両側のオソグイ、メオソグイを、柴を立てて隠し、同時に、オソの入り口からクマが脇にそれないようにする。ここは長い柴だけ立てても隙間ができるので、まず、両

側に短い柴から立て、次にそのそばにちよつと長いもの、だんだん長いのと、がっちり立てて厚くする。

スゴやイシモチがある上の方も柴で隠して藪の中のようにしておく。オソの入り口だけでなくて、オソ本体の中も、入り口から三十センチから五十センチぐらいまで両側に細い柴を立て、カモフラージュする。オオソとメオソの杭が見えないような格好にしておけばよい。細い柴なら、天井が落ちた場合でも邪魔にならないんだ。

とにかくオソの入り口が分からないようにする。風で倒れた木の根元の所に穴が開いているから、そこを通って行こうとか、他には行けないし、どこから見ても柴しかない、と言うような格好のことを考えてやらねばならないんだ。だいたいそんな感じだなあ、オソの場合は。

### ■使ってはならない木

三面ではクマには触れさせてはならない木があるから、オソでも使ってはならない木があるんだ。三面の方言でハナノキと言って、モミジ、カエデ類の

木。それと枯れた松。オソでこれらの木を使ってもいい所は、垣柴と、タナをつくる場合の、そのタナの箇所のみなんだ。本体には使ってはならない。

### ■とったクマの運び方

とったクマは、たいていは解体するけれども、子グマの場合だと解体しないで、ちよつと皮むいたと、いうのを表すために皮目を立てて担いで帰る。解体して、たとえば一人の場合だと大きいと残してこなければならぬわけだ。で、また運びに行くと。往復することもあるし、翌日に行くこともある。かなり大きいのだと、二人で行くこともある。

また、あまり遅くなる場合は、解体は翌日行つてするということ、そのまま帰つて来ることだつてないとは限らない。さまざまだ。もつとも奥山だけでもないんだ。当然集落の近くの後ろ山でも、前の山でもその辺にも仕掛けたんだしさ。それからだんだんかなり奥まで、その家その家だね。